

平成十九年5月6日、当山法徳寺において降誕会・永代経法要が行われました。お経、法名読み上げの後、伊勢原の長龍寺ご住職、杉山保代師より法話がございましたので、ご紹介させて頂きます。

平成四年、ご主人である、前住職顕明師が、秋の報恩講法要中に突然の死、残された4人のお子様の子育てをされながら、住職を継職され、大変なご苦労の中、早十五年。

ご自分の実体験を通して、浄土真宗という親鸞さまの教えに出会い、ご主人との仏縁を感じながら、いのちの尊さ、人と人とのご縁をありがたいとお話になりました。人生、思うようにいかないことも多々あるけれど、そこからまたご縁が広がり、人と人の関わりによって、自分は育てられていることを感じる。ご主人の死を通じて、日々、阿弥陀様のあたたかさを感じる。人の命は、はかなく、いつどうなるかわからない。毎日、毎日を大切に、今、自分ができることを精一杯やりたいと思う。ただ、主婦として思うことは、すべてを完璧にこなそうとすると疲れてしまう、少し手を抜くことも、愚痴をこぼすことも元気でいるために必要です。いつも笑顔でいられるように過ごして、みなさん良い人生を送りましょうとの言葉に親しみました。そして、大変なご苦労をされたにも関わらず、阿弥陀様のあたたかさを感じ、強く、明るく生きていらっしゃる杉山先生のことを、人生のお手本にしたいと思えるお話でした。中でも、私が、一番印象に残っているお話は、「今でも思い出すことは、主人が亡くなる当日、結婚して、数十年、一度も、褒めてくれなかった主人が、初めて、「今日の朝ごはんは美味しかったよ」と言ってくれました。珍しいこともあるもののだと思ったのでした、今思えば、あの言葉が、主人からの最後の私への送る言葉だったと感じます。主人との別れは悲しいことですが、もし、主人が亡くなることがなければ、今、こうして、皆様の前で、お話をすることもなかったことでしょう。私の代わりに主人がお話に来させてもらったかもしれない、そう思いますと、人生というのは、不思議なものです。今日は、主人と共に、法徳寺にお参りさせて頂いている気持ちです。」と話されたことでした。

報告者 伊東祐子

